

一九三三年秋の河西回廊

——〈紹介〉明駝著『河西見聞記』——

多 田 狷 介

I 明駝著『河西見聞記』所収冊のことなど

顧頤剛著『西北考察日記』（甘肅人民出版社 2002年1月）を手にした。本冊は胡大浚主編「西北行記叢萃」¹⁾中の一冊で、顧頤剛の該書の他に、『北草地旅行記』、『游隴叢記』、明駝著『河西見聞記』の三書を収め、かつこれら四書に関して「達浚・張科点校」とする。以下、点校者の記した本冊「前言」より摘録する。

『北草地旅行記』の著者は李德貽、字徂蓀、四川彭県の人。1862年生まれ。清末から民国初年、甘肅省内で地方官勤務。清末1907年、鎮江より北京に上り、北京から蒙古の草原を経て新疆伊犁地方に入って方角を転じ、河西を経て蘭州に到った。著書は二万余里、二十余箇月の旅の見聞を記す。次子季偉が1936年これを清書、刊行した。1993年には「西北文献叢書」にも収録されたが、本冊には1936年原刊本を点校して収録。『游隴叢記』の著者は程先甲（1874～1932）、字一夔、又の字鼎丞、江蘇江寧の人。清举人。江南高等学堂国学教授。1910年代末、北平から包頭、寧夏を経て蘭州に至り、甘肅省署に奉職。20年代初め、同じコースをたどって北平にもどる。著書はこの往復の旅と蘭州での見聞を記す。本冊には1922年原刊本を点校して収録。

明駝著『河西見聞記』。この冒頭の「自序」に「去年（1933年）の夏、私は用事があって蘭州から敦煌に至り、同年秋には来た道を逆にたどって敦煌から東に帰った。全部で七箇月を費やし、万里を超える路程を踏破した。帰路では時間を割いて河西各地の政治、経済、社会、文化から山川風物の種々相までを游記の体裁で書き写した」と言う。本冊点校者の「前言」も、著者のこの「自序」を引用するが、著者については「生平無考（経歴不詳）」と記す。1934年上海中華書局原刊。1987年には「西北文献叢書」にも収録された。ただし該版本は誤脱が多いので、本冊には1934年上海中華書局原刊本を点校して収録。

『西北考察日記』は、著者顧頤剛の1937年から38年にかけての甘肅における調査活動の生き生きとした記録。顧先生生前には刊本はなく、1952年に油印本を若干の友人に贈っただけであった。顧先生の西北考察時期の助手の一人だった王樹民先生が1989年に日記原稿を校訂して「甘肅省文史資料」中の一種として、甘肅人民出版社から正式に刊行、世に出された。油印本と刊本とを相互に参照、点校して本冊に収録した²⁾。

本稿は、本冊所収のものを底本として、『河西見聞記』を抄訳、紹介する。その際、原刊の明

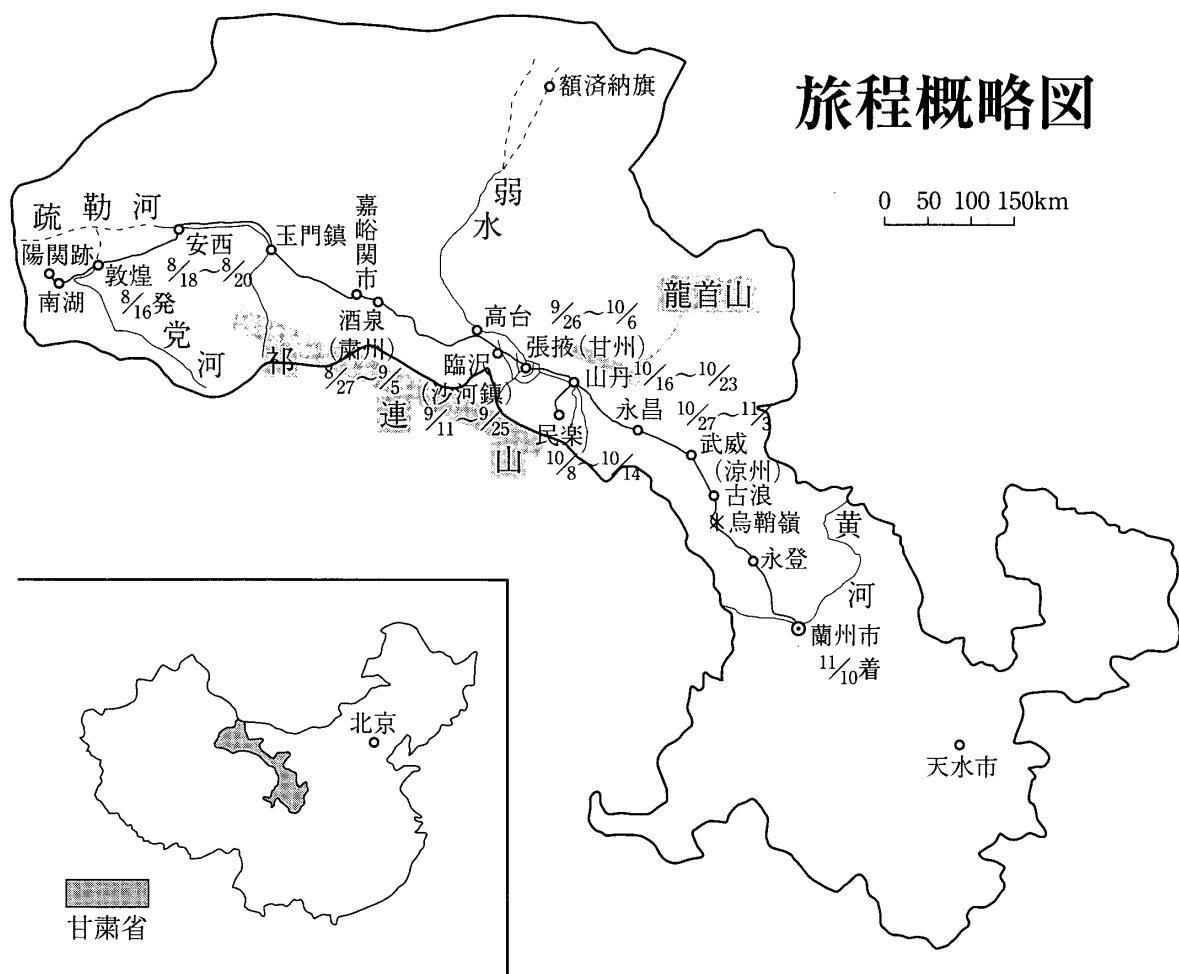
駝著『河西見聞記』（上海 中華書局 1934 年 12 月 新中華叢書 文芸彙刊 1）と「中国西北文献叢書」（蘭州 蘭州古籍書店刊）第一百二十五冊西北民俗文献第九卷所収の明駝著『河西見聞録』を参照した。以下必要に応じて原刊本を G 本、叢書本を S 本と略称する。

なお、底本所収冊子巻頭の「編者の話」に「どの書にも校勘記は付けず、文中の人名・地名・書名等の固有名詞、および引用文等の誤りについては該所に角括弧を付して校訂した。西北地区の大事な地名で、今と異なるものにも角括弧を付してその中に今の名称を補った。重要な物品や若干の難解な字句にも角括弧を付して簡単な注を加えた」とある。本稿以下の本文中の〔 〕はこれに従ったものである。対して、本稿以下の本文中の（ ）内は、原則紹介者の補記である。なお、本稿「V 著者明駝について」中の〈 〉中には、本稿所載本『紀要』の頁数を示す。

II 『河西見聞記』の目次と旅程概略図

以下に明駝著『河西見聞記』の項目を拾い出して目次を作成する。漢数字の頭番号も紹介者の付加。さらに所収冊『西北考察日記』の頁数を付加する³⁾。

一 自序	96
二 陽関古道	98
三 南湖村の村長の話	100
四 月牙泉	102
五 千仏洞	103
六 農坊制と区村制	106
七 敦煌市街	108
八 夜ゴビを行く	110
九 安西の街の近郊	113
十 布隆吉と三道溝	115
十一 税糧一石につき塩税三元を徴収	118
十二 馬に乗って嘉峪関に入る	120
十三 旅団の夜宴	122
十四 金塔県滞在三日の思い出	125
十五 三頭引きの大車に乗って高台县を過ぎる	127
十六 威狄堡の二大権威	131
十七 弱水の流砂	134
十八 雑費と“看糧”	136
十九 沙河鎮と黒水国	139
二十 金の張掖	141
二十一 甘肅と青海の境	146
二十二 家屋は薪にし、でたらめな税金も現生で	148
二十三 石燕飛ぶ	151
二十四 鎮番の種々相	154
二十五 古浪硤を過ぎる	157
二十六 南大路と北大路	161 (163 止)



Ⅲ 敦煌郊外と敦煌市街

蘭州を立て西進し、敦煌城内に入ったのは八月四日早朝のことであった。宿舎に着くや終日睡眠し、連日の昼夜を分かつため労苦で積もりに積もった疲れを癒やした。先ず、翌五日から七日にかけての陽関跡への往復と往路立ち寄った南湖村の村長宅での見聞を紹介する。すなわち、目次の「二 陽関古道」と「三 南湖村の村長の話」相当部を続けて全文訳出する。

五日午後四時、馬を借り上げ、携行食品や飲み物、果物を袋につめて馬の背に載せ、ほかに表をつけない羊の毛皮の外套⁴⁾を持ち、準備一切は整った。夕陽に照らされながら、公安警官が一人馬に乗って先に立ち、私を西門へと導き出してくれた。ここを出て半里(250メートル)も行かないうちに党河に到る。河は南から北に流れ、幅は十丈(約3.3メートル)ほどで、上に木の橋が架かっていて、車馬が通れる。実際のところは、河水はごく浅く、もっぱら耕地の灌漑に利用され、河床はほとんど露出していて、車馬も水の中を行けるのだ。橋を過ぎると、西南に曲がり、党河の西岸を遡り、幾筋もの用水路を何度も越え、沢山の林や莊園——ムギ・アヘン・コーリャン・ウリ、作物はなかなか多い——を過ぎて二十里の地を行ったが、景色はまるで変わらない。敦煌近郊はまさしく砂漠の中のオアシスである。

三十里の土の台地を行ったところ夜になり、次第に砂丘の上りにさしかかったが、目にするのは一面ゴビの荒野である。碎石・砂土・道に落ちている少量の家畜の糞以外は、樹木は勿論一本の草さえも容易に見あたらない。星明かりを頼りにゴビの中を四十里行き、^{オボ}店を過ぎた。^{オボ}店とはモンゴル語の石堆^{いしづみ}の意味で、あるいは顚博とも表記されるが、ここの党河河畔に石堆があることからする地名であろう。石堆の高さは一丈ほどで、その左側にあった店屋はとうに壊れてしまい、新しい店は石堆の西南五里ほど離れたところで営業している。私たち二人はそこへ行って休んだ。店屋の高さは七尺（約2.3メートル）も無く、合計三間が、河端に南向きにほぼ品字形を成している。店の主人は客が来るのを見ると、家畜の糞を拾って河の水を沸かして客に供するのだ。二人が用意してきた飲み物はすでに道中で尽きてしまった。果物はまだ後のために残しておかなければならない。と言うわけで河の水こそカンフル注射だ！ 携行食品を食べ、白湯を飲んだ。そんなにひどい味でもなかったよ！ 私たちが飲み残した白湯は店の主人が持ち去り、^{ヤキソバ}炒麵に混ぜ込んで食べてしまった。このヤキソバというのは、肉ヤキソバでもなければエビヤキソバでもない。はっきり言うと、ハダカムギをよく煎って粉にひいた一種の食品である。店のオンドルの上はナンキンムシが沢山いる。腹を満たした後の私たちは外に出、羊の皮をゴビ原上に広げてその上に横たわった。満天の星を眺め、さらさら流れる水の音を聴いているうちにいつの間にかぐっすりと寝込んでしまった。夜明けに目覚め、五十里を疾駆し、幾筋かの砂丘を突っ切って、ようやくラクダソウの生えた砂地へと乗り入れ、乾いた砂地の河床——河床の岸壁の縦断面を見ると、上の一丈ほどは砂礫層で、その下は紅土層である——を越えた。砂の窪地をさらに二十里行くと、前方にようやく家屋や樹林が現れ、それらが地平線上からゆっくりとせり上がり、私たちの眼前に迫ってきた。すなわち敦煌南湖地区である。所謂南湖とは、南山の雪解け水の流れ込む草の湖という意味である。清代この地は軍隊と警察の放牧場だった。今はアヘン・コーリャン・ムギ・アワを特別に植えるところが少しある以外は、ほとんど放牧に適した一面青々と、生き生きとした豊かで美しい草原である。真ん中を東から西へ一筋の澄んで底まで見える泉の水が流れている。この十里ほどの広い平原に養われる四十戸ほどの住民は二つの村落を構成するが、私たちはまず東端の大営盤に行った。

村には宿屋はない。一軒の民家を選んでそこに入って二時間休んだら、午後の三時を過ぎてしまった。急ぎ馬にまたがって大営盤を出立、三里の路を行き、一筋の砂丘を越え、古銅灘〔今は古董灘と言う〕に着き、ここの砂州で何とか漢瓦や漢銅の幾らかでも探したいものと思った。それで、砂州上を何度も大きくぐるぐる回ってみたが、わずかに貨幣二枚と銅製の小さな印章一個を手に入れただけだった。本来、流砂に埋もれた廃墟で古文物を探し出そうとしても、組織的な大規模発掘をのぞいては、甚だ得るところ少ないものである。海底から針を浚うようなやり方でこれだけの物を手に入れたのは全くの偶然も偶然の幸運である。古銅灘から三里も離れない南湖の西端に一つの村落がある。大営盤村から流れて来たあの泉水を挟んで兩岸に十数軒の家が建っている。南岸の地名を“南工”，北岸の地名を“北工”と言い、合わせては“工上”と言う。私たちは南工から転じて北工に入り、遙か彼方西南十里の外にある砂丘上の古い堡^{とりで}を望んだ。土地の人の話では、そこは清代に巴彥布刺⁵⁾の置かれたところなるよし。そこから甘肅と新疆との境の野馬泉まではほぼ六站、新疆の若羌県城^{ホータン}まで十四日の、和闐^{ホータン}までなら二十四日の日程である。この道はカシュガルと肅州（酒泉）を結ぶ近道である。

北工から東北に曲がって砂地を三里行き、四壁崩れかけた陽関古堡に夕陽を浴びつつたどり着いた。一面荒れはて、煉瓦や瓦のかけらがそこかしこに散らばっていた。堡跡の東南の角に石碑が一つ倒れていたが、面上清人の筆による「古陽関」の三字が記されていた。一昨年、西北（科学）考察団⁶⁾が堡跡の東北で数箇所の古墓を発掘した痕跡がまだ残っていた。私たちはしばらく黙ったまま夕暮れの風砂の中に立っていた。覚えるのは空虚さと寂寥感の極みのみ！これにて一鞭をくれ、東北に向かって紅沙溝沿いに馳せ、六里も行かずに往路に合し、また俄ト店を経由して敦煌県城に向かった。来たときの馬の蹄の跡はもう風砂に捲かれて消えてしまった。天上の北斗星と南山の影を標にゴビの中を一夜駆けたが、私と警官だけで、誰にも出くわさなかった。（以上、「陽関古道」終わり）

もう一つ、大いに記憶に値することがある。

私が大営盤で休んだその家は、南湖村の村長の家だった。家屋は新築で、ホールには真っ赤な緞子の目出度い掛け軸が掛けられ、その真ん中には、“急公好義”の四個の大金文字がはめ込まれている。この軸は前の県長謝某とこの県の商（業）会（議所）の会長兼第九師団参謀王某等が最近贈ってきたもので、村長の功績と徳を大いに誉めたたえている。ホール左端の大きなオンドルの上には三組のアヘンランプがずらっと並び、横になった三人の客人が揃って煙管を捧げてスーシューハーハー、作業は佳境に入っている様子——客人中下手の二人は村長の親戚と友人である。二人は以前、村長が公金を前納しなければならないときに借金してこれを助けてやり、いまはその取り立てに來た高利貸しの商人である。上手の一人は、県政府の収税班の督促責任者である。私が当地敦煌県の公安局長の友人であると口実を設けて村長と話をした時、彼は以下のように説明した。南湖全村の住民は合計六十余家、人口五百余、耕地を有するのはどうにか三十一戸——毎戸耕地八十畝（1畝は6.667アール）——野良仕事に耐える壮丁は最近三十六師団の兵員補充のために三十一人が連れ去られてしまった。それで、三十一戸の内、実際にどうにか負担に応じられるのはわずかに二十四戸。かつ、ここ数年来、負担はますます大きくなり、一般庶民は疲弊の極みにある。そうして（民国）二十一年度の帳簿に記載された全村の負担項目を挙げて言うと、以下のような数値になる。

項 目	価 格	項 目	価 格	項 目	価 格
三十六師軍馬九匹	360.00	軍糧・綿花・ブリキ	280.00	農業税本体六十四石	1560.00
徴発中に死亡した牛十六頭	500.00	徴兵費・補官費	1040.00	換算した草価	358.00
來往の軍隊用の羊二三五頭	400.00	生アヘン(軍用)一千八百両	1260.00	指糧借価	120.00
糧秣供給五十六石	1500.00	軍用牛羊皮	153.00	金庫券	320.00
軍装費	717.00	軍用品・交際雑費	820.00	アヘン栽培の罰金	2300.00
合 計	12688.00	〔以上、単位は元〕			

（上表、指糧借価・金庫券は意味不明だが、そのまま写した）

農業税本体を基準にして割り当てる方式で、戸毎に分担させてゆくと、一戸一年五百二十八元五角二分弱となる（合計欄は11688.00ではないのか？ 11688.00元÷24戸＝487.00元だが？）。ただし、戸毎の収穫量は穀物六十四担（1担は50キログラム）に過ぎない。その総額は最高価格で計算しても二百五十六元前後にしかならないから、完全な赤字である。そういうわけで、一

般庶民は“飯は食わなくてもいいが、金は納めないわけにはゆかない”という状況の中で、ただ幾畝かアヘンを植えて金額に対応することしかできない。アヘンを作れない人は全く気の毒で、借金以外は、体を売るか、物を売るかして払うほかない。要するに、特別な力が有って金を納めずに済むのでなければ、中流の家は段々貧家になり、その末はさらに下って一家四散、滅亡する！

村長はさらに「公金が緊急を要する時には、まず何より村長があちこちから借金してこれを納めなければならないが、その年利は三割前後。公金納入の後、元金に利息を加えた分を一般住民の身に割り当てるが、村長が回収すべき貸し金は目下五千元を超える」と説明した。最後、かれはまた「村長を勤めるのは奉仕みたいなもので、各戸は年にたったムギ四斗をくれるだけだ」と言い出した。

ところが、事実がとくに彼に代わって“借金して納入する時こそ村長が一番もうけられる時”ということを説明している。村長の話を一席聴いて、私はこの世外の桃源郷に人間地獄を見いだした。これが脳裏に深く刻まれて消えることのない印象である。（以上「南湖村の村長の話」終わり）

八月七日午前十時、敦煌県城にもどる。八日夜、楊炳辰県長・省督学（視学官）趙子文に会い、明日三人で月牙泉に行くことを約束する。九日午前六時半出発、月牙泉へ。一行に、公安局長易仲權も加わる。夜、県城にもどり、月牙泉で捕った魚を油でいため（煎）て食べる。十日、十一日は敦煌城内に泊る。十二日午前六時出発、易公安局長と千仏洞（莫高窟）に行き、夕陽の中を帰城。

十三日から十五日の間は敦煌城内に在る。主として郵便・電報事情とアヘンのことを記した「七 敦煌市街」を以下二段に訳出する（七十種近い商品の市場価格表は省く）。

敦煌から天津あるいは上海あてに普通郵便一通を出すと、どんなに早くても四十日はかかる。郵便は勿論敦煌で唯一の新式通信手段である。だが、敦煌から安西までの郵便路は三日を要し、おまけに三日間に一便しかない。安西から肅州〔今の酒泉〕への郵便路は四日を要し、かつ三日間で二便である。肅州から先、ようやく毎日昼夜兼行の二便になる。といった事情で、最速四十日というのは各便順調に接続しての話である。そうでなくて一度放って置かれたりしたら数日たってしまう。電報についても、郵便局は先ず安西に郵送するほかない。それで、天津、上海一帯の商業情報が敦煌にとどくには、どんなに早くても十日後になる。通常の道のりなら、敦煌から古城子〔今の新疆奇台县〕・西寧まではいずれも二十一日。蘭州・迪化〔今のウルムチ〕・和闐〔今の和田^{ホータン}〕へはいずれも三十日。包頭へは七十日。交通手段は大車（家畜に引かせる大型の荷車）か馬の背かである。敦煌は地理上南疆から北京・天津へのルートと青海から新省〔新疆を指す〕への近道ののど首をおさえており、西北の交通事業がもしよく発展の機会を得られるならば、必ずや繁栄の日を迎えよう。

敦煌に到着早々の人はある種珍しい印象を受けよう。県城の最も繁華な東関の什字街上を行くと、軽食の屋台を並べた小商人の幾人かが目に入る。かれらは商売をするかたわら暇を盗んでは屋台のそばに寝ころんでアヘンを吸う。当地の禁煙善後局の責任者は次のように言う。城内で登録済のアヘン“営業所”は合計四十軒ある。その他になお外来の商人で直接に田舎へ行って生アヘンを買付け、草原から北京・天津・包頭・帰綏（今のフフホト市）へ運ぶ者がいる。かれら

は全く隊商として行動し、一部は連発銃を携行する。土匪にアヘンを奪われるのを防ぐためとも、徴税に抗するためとも言われる。本当のところはどうか？ 本人たちだけが知っている。敦煌全体でどのくらいの生アヘンが生産されるのか、だれも見積もったりしない。植える者は植え、売る者は売り、吸う者は吸う。言ってみれば一切は無政府状況下に進行している。生アヘンが収穫されるやいなや、農民は政府の公課に迫られ、銭一元を借りて月に元利あわせて生アヘン六ないし十二両（一両は50グラム）もの高値にもかまわず、借金して納税する。その結果、一箇月もたたないうちに生アヘンはどんどん商人に吸収され、東方の生アヘン市場に運ばれて儲けの種となる。当地ではアヘン価格が一元で四両から一元で二両半に高騰する。それだけではすまない。夢中恍惚としていたアヘン吸引常習者にとって、こうなったからには“面に菜色（栄養不良の顔色）有り”“野に餓殍（^{がひよう}餓死者）有り”の眞（^{おそれ}）を免れない。民族主義の立場から、大多数の敦煌人の“怠け者が自分の仕事を年下の怠け者におしつける”という無責任なやり方を見る時、精神をアヘンにむしばまれてしまった人びとのために本当に泣きたくなる！

IV 敦煌から蘭州へ——1933年8月16日～同年11月10日——

八月十六日朝五時敦煌県城を出発、新店〔今の新店台村〕、疙瘩井子〔今の疙瘩井村〕を経て甜水井子〔今の甜水井村〕に宿る。宿屋のオンドル上にはナンキンムシが充満。やむなく、建物を出て、ゴビ上露天で二時間眠る。

十七日黎明、疙瘩井子を立ち、芦草溝を経て、六工村に到り宿る。

十八日早朝六工村を立ち、馬に乗ったまま安西県城西門に入る。「敦煌から安西まで全部で三百八十里（190 km）、普通四站に分けて行くが、私たちはたった三十六時間で走破（出発から到着までの全時間で、睡眠・休息の時間も含めてのようである）、その結果馬一頭を乗りつぶした」（113頁）。午後は城内で休息。

十九日午前中、安西公安局で雑談。午後は宋公安局長と疏勒河畔に行き、川魚を逐う。

二十日午後五時、日射しはそんなに強烈ではなくなった。同行の×××君と共に安西県城を立とうとし、「騎馬警官の先導で東門にいたると、——この時、政府の旅行証明書を持っていたにもかかわらず、城門の守衛に三十分も足止めされた。駐屯軍の連隊長から妨害してはならないとの通知がとどいて、ようやく解放され、東に向かって馬を駆けさせた次第」（115頁）。小宛駅〔今の小宛堡村〕で二時間休憩後また騎乗して東へ。

二十一日午前十時双塔堡〔今の双塔堡村〕に到る。十数戸の人家があって、他にアヘンとムギの畑が少々。午後四時ここを出、夜は布隆吉に宿る。

二十二日の日中、布隆吉を発し、三道溝に入る。目次では「十 布隆吉と三道溝」。その五分の一ほどを以下に訳出する。

布隆吉城の周囲は六里前後あるが、今でも住んでいるのは二十家ほどにすぎない。城内は、たった一本の大通りの両側に幾十軒か建物があるだけで、その他は一面遊牧に都合のよい草原である。草原上には十数本の大樹が点綴している。——話によると、これらの大樹の一部は年大將軍〔年羹堯⁷⁾を指す〕西征の際のお手植えなるよし。ところで、布隆吉は年氏麾下の一将帥の名前である。その後、左文襄〔左宗棠を指す〕西征の時にはこの城が大本営になり、新疆に入って後

は屯田兵がここで開墾に従事した。しかし、現在はまるで様子が変わってしまった。城内には今でもなお安西県第二区区长様が住んでいて、かれの家が区役所になっている。一箇月前、この地は大変な騒ぎだった。そのわけは、省政府の禁アヘン委員会が派遣したアヘン調査委員の代表が当地にやって来てアヘン畑を実地調査した。各村の村長たちも当地にやって来てこのアヘン調査委員の代表様に挨拶し、あわせて三、四日がほど、代表様に日に三度の飯をご馳走し、アヘンや飼葉、および随員——県政府の委員と下役——の雑費で、総計五十元以上かかった。しかし、大騒ぎしたからといって、勿論アヘン畑の精密な調査結果が出るわけではなく、一般民の肩にかかる負担がこれでちゃんと軽減されるわけでもない。区长や村長が代表委員をもてなすのに使った金は六十元以上の額にもなって各村々の一般民の肩に割り当てられる。これもまた政治上的一幕のドタバタ芝居なのだ！（115～116頁）

二十三日朝、三道溝の市鎮を出発、昼ごろ、馬にまたがったまま玉門県〔今の玉門鎮、元の玉門県治。1958年に県制が撤廃され、玉門市に併入〕城の北門に入り、城内に泊る。

二十四日午後五時、玉門県城南門を出、三十里店を経て、下赤金堡〔今の赤金鎮の一部〕に到る。

二十五日午後四時、下赤金を立つ。

二十六日昼、恵回堡〔今の新民堡村〕で休む。午後出立、双井子、嘉峪関を経る。

二十七日午後四時、肅州（酒泉）城内に入る。

八月二十八日から九月四日の間、肅州城を出なかった。「十三 旅団の夜宴」はこの間の記事。以下に全文を訳出する。

九月一日、肅州駐軍××師団××旅団の×旅団長が甘肅省政府事務局の×視察員にご馳走することになった。時間は正午、場所は旅団司令部、陪席の客は肅州城内各機関・各団体の長と紳士たちで、他に肅州在勤中の公務員が数名。私も招かれて相伴した一人であった。もともと私は辞退するつもりでいた。だが、当地の習慣にてらすと、招待された客がやって来ないというのは、主人の面目を失わせることになる。また、×旅団長はとても客好きなのに、往路肅州に立ち寄ったとき、野外演習中で会えなかった。それで、今回の復路では、折りを見て一度うかがうつもりではあった。それで、二度目の通知を受けた際に、この盛大な宴会に出席する決心をした。

私は時間厳守の習慣を捨てていなかったもので、宿舍を出て、十二時に旅団司令部に着いた。×参謀長が中庭で出迎えてくれたが、応接間に入ってみると、結構沢山の客がいる。彼らの一部は二つのテーブルを囲んでマージャンの最中である。他にその回りに立って見ている者もいる。×視察員は妓楼の女二人の中の一人を抱いてでれっと座っている。女は当地の習慣に従って×旅団長が賓客を接待するために臨時に呼んだのだ。×旅団長はマージャン卓から立ち上がって私に一寸挨拶してからまたマージャン卓へもどった。酒泉県長×先生がたった一人スイカの種をかじりながら新聞を見ているのが目に入ったので、私はすぐにそこへ行って、向かいの椅子にすわり、彼と閑話した。

午後二時、客の全員がそろった。女はもう×視察員から高等法院第四分院の院長の懷に移り、マージャン卓の公安局の×局長の席もアヘン酒印紙税局長に替わり、×県長の座っていた椅子は×参謀長に譲られた。二時間前に比べるとあの手この手のからくりも大分増え、スイカの種の殻も随分と床に散らかってきた。とは言え、相変わらず総体まだ穏やかで、そう大した変化はなか

った。私はすべての新聞のどの一字も読み終わってしまった。菓子とスイカの種が遠方からもたらされた物であることは承知していたが、私の胃袋はそんなに欲しがりもしない。大して話すこともない。それで、にぎわいの最中で、私はかえってひどく空しくなってしまった！ 三時ころやはり騒がしいのがあまり好きでない×参謀長は私を重囲の中から救い出し、いっしょに旅団司令部の東側の庭園に連れて行ってくれた。

旅団司令部は安肅道〔清雍正七年、西暦 1729 年、安肅道を肅州に置く〕の道尹公署の旧跡で、また三十六師団⁸⁾ 司令部の旧跡でもある。庭園は面影を留めていると言える。だが、空高くそびえた古木や両手で抱えるほどの大樹の多くは三十六師団が切り倒して薪にしてしまい、ほとんど残っていない。これはいささか殺風景の感を免れない。目下、×旅団長が×県長と相談中で、この庭園の修理作業が近く始まるところである。庭園の北の角に教室が三つあるが、今は旅団司令部の電話室になっていて、ここで甘州（張掖）や安西の旅団司令部と通話できる。六畝（約 40 アール）の広さの庭園で、私と×参謀長は四方山の話をしながらか二時間座っていた。そのうちに旅団長の従兵が宴会の開始を告げにきたので、ようやく応接間にもどった。

客人は全部で二十人ほどで、三卓に分かれて座った。先ず主人が客人に酒を勧め、客人がこれに謝した後にまた返杯し、それから料理にとりかかる。一番忙しいのは二人の女たちである。常に三つのテーブルの周りをぬかりなく巡回し、懇ろにサービスする。料理の四、五種を食べ終わると、客人たちは拳を始める。私の座ったテーブルは酒を飲む人が少ないようで、拳を打つ声も大して盛り上がらない感じだった。それで一回り打拳した後はまた女たちに皆に酌をさせた。乾杯がすむと、同卓の国民党党整委員会の×委員が何と一動議を提出した。

“女たちは当然新来の年若い客人にお酌して飲んでもらうべきだ”と。“そうよ！ 先ず×視察員にお一つ！”×視察員が抵抗する間もあらばこそ、女は澄んだ声をあげつつ手ずから客人の口へ一杯の酒を注ぎこんだ。

私たちの×委員の上役の“次は×視察員……”と言う声の終わらないうちに、これにかぶせるように“いやいや、私は飲みますよ。何も人に飲ませてもらうことはありません”と言う少し甲高い声がした。“そんな！ じゃ私の面子はどうなるの？ だめよ！”女は客人の一人が手酌で一口飲もうとすると、いかにも怒ったようなそぶりで酒杯を捧げ、その口中へ攻め込もうとする。“お前の面子なんかもう立てたじゃないか。うん！ 今度はおれ様の面子だ！”こうわめいた客人は口に酒杯がとどこぬうちに二本の指で女の手中の酒をテーブルの上に空けてしまった。

すると、テーブルにまた別な音声がひびいた。“それじゃ君はこの女が好きじゃないのか？”“そうさ！ 当地の女たちは、当然なことによその女たちと同様にその人格を尊重されるべきだ。だからこんなやり口はとてもじゃないが受け入れられないよ！ 旅団長が私たちにご馳走してくれているんだから、私たちがこれをじゃんじゃん空ければそれでいいじゃないか！”

ある客人が以上のようなセリフを吐くと、座は三分ほど静まりかえり、女たちも客に酒を注ぐ芝居を止めてしまった。

つづいてまた酒の余興になり、最後の料理——手抓^{てづかみ}羊肉——を食べ終わったときはもう夜の七時になっていた。手抓羊肉というのはとろとろに煮込んだ羊肉の塊で、客人がたべる時には五本の指を総動員して、むしり取るのだ。×旅団長のコックは回族で、手抓羊肉を作るのはお手の物だ。私は元来羊の肉は苦手なのだが、この時初めて臭味のない羊肉を食べた。

食事の後、×参謀長のところでまた二時間話し込み、当地の政治・軍事の諸問題に関して、大いに談及した。私は再び陣容を整えた竹牌の戦局には参加できないので、九時に魏県長（先の「酒泉県長×先生」の姓は魏だったのだ）といっしょに旅団司令部の正門を出た。翌日になって、昨日の午前十一時に旅団司令部に集まった客がその夜の十一時になってようやく辞去したことを知った。（以上、「旅団の夜宴」終わり）

「十四 金塔県滞在三日の思い出」では、一箇月半以前の往路、肅州（酒泉）東北の金塔県に立ち寄り、三日滞在中の見聞を回想する。特に、金大垣〔今の金大村。金塔県城の南にある〕の農民の加重負担による窮状、水利の未整備、竜王菩薩信仰等を述べる。

九月五日午前十時、大車に乗じて肅州を立ち、臨水駅⁹⁾〔今は郷名〕に到る。その夜十時、臨水駅を立つ。

六日午前十一時、高台県管轄下の塩池駅〔今は郷名〕に到る。以下に「十五 三頭引きの大車に乗って高台県を過ぎる」中の一部、塩業衰亡の様相等二段落を訳出する。

塩池駅中、住民は六十家前後。大部分は塩業に従い、牧畜業これに次ぐ。というわけで、牛羊の糞が当地の主要燃料になっている。甘肅のその他の多くの村落と同様、塩池駅の街道上、何時でも、十歳前後になってもズボンを穿かない沢山の男の子、女の子が手に柳の籠を提げて牛の尻にくっついて歩き、ホカホカの牛糞が地上に落ちたと見るや、我先にとこれを手づかみにして、自分の柳籠に入れるのだ。

塩池駅から花牆子まで九十里の道のり。四十五里は草原、四十五里は砂丘。新溝〔今の深溝村〕の村落が草原と砂丘の境に位置している。ずっと通ってきた道の南側遠くには白い雪の帽子を戴いた祁連山の余脈が連なり、北側には低い黒ずんだ一筋の禿げ山。なんと単調で、人の気を滅入らせる景色なのだ！ 新溝は住民わずか十数家の村落なのにそれでも街道を行く旅客を相手にする私娼がいるとのこと。このような社会現象には全くぞっとさせられる。

七日午前、弱水湾曲部南岸の花牆子〔今の花牆子村〕に到る。ウリの産地として著名だが、夏場は蚊の大本営。甚だ悩ましい。ここより草の生えた河原をさらに東南に二十里行って黒泉駅〔今の黒泉郷〕に到る。

八日午前黒泉駅を立ち、午後一時高台県城に入る。今日の道中の連れとなった前の甘肅高等法院第四分院の事務官と一緒に県政府を訪れたあと宿に入る。以下は相宿の種々相。

宿は様々な人びとでいっぱいだ。天津から来たカナキン売りの客がいる。山東から来た大道技芸者流がいる。四川から来た床屋の職人がいる。西安から来た旅の医者兼薬売りがいる。涼州（武威）から出て来た“馬班子”^{うまぐみ}と称する売淫の娘たちがいる。甘州（張掖）および御当地高台県下の農村から来た塩売りがいる。さらに各部隊が派遣した提款委員^{とりたて}たちがいる。そんなこんなで大にぎわい。夜、私たちは提款委員の戸口から漏れる小唄を耳にした。“馬にまたがり鉄砲背負って、金持ちの家なら金巻き上げて、年頃の娘は馬の背に、年頃の娘は馬の背に……”（130～131頁）

九日早朝高台県の宿を出、当日午後六時、威狄堡の宿に入る。以下は、高台県出立時の、哀れな高台県長の話。

早朝出発。車が宿の大門を出ようとする時、県政府の小使がやって来た。かれの言うには、県長がたった今みずから見送るつもりで、城門のところまで来たのだが、車を衛兵に止められてし

まった。上官の命令だと言う。目下軍事費が甚だ差し迫っている。前任の県長はあまりの金づまりに、機を見て（甘肅）省（政府）へ逃げ帰ってしまったので、県長が勝手に門を出るのを許さないのだそうだ。県長はどうしようもなくて県政府へ引き返し、小使をよこして挨拶させたということだ。私たちはただただ沈黙して大車の中に座ったまま威狄堡〔今の臨沢県新華郷〕へと出発した。（131頁）

十日は威狄堡で休息。

十一日午前、威狄堡を出発、始め二十里ほどの草の生えた河原を行き、それから十里に渉る砂丘を越えると、遠くぼんやりとかすむ樹木の中に目的地が見えてくる。臨沢は確かに沼沢に臨んだ都市なのだ。俄然うれしくなる。ところが、数日の間に弱水の流砂のただ事でないことを知らされる羽目になる。

十八日朝、臨沢県城の東門を出て、東に向かい、一帯の村落、耕地の様相を実見。アヘンの畑、ムギ畑があり、また果樹園もあり、その間を水路が縦横に走って灌漑する。このようなところは確かに肥沃な土地と見えた。しかし、広い平原中、耕地は一部であり、雑草の生えるにまかせた荒れ地や水のたまった湿地の草原のほうがさらに多い。ポプラの林のある隆興村に宿る。

十九日朝、隆興村を出発、北上して牛車に乗ったまま仙姑廟の渡し場で弱水（別称黒水河、また張掖河とも）を越える。西に転じて弱水の北岸の平らで真っ直ぐな大路を行く。左側は水が澄んで底まで見える用水路と緑の葉が陰をつくっているポプラの並木で、右側は全部耕地で、このような景色がずーっと平川堡〔今の平川郷〕まで続いている。仙姑廟から平川堡の間、右手に見える耕地はそこかしこ流砂に侵略占拠されてしまっていた。あれさえなかったら、私は自分がほとんど上海西方の田舎にでも居るようなつもりになったろう！ 平川堡で小憩の後、弱水を渡って臨沢県城にもどった。このたびの遠足によって、弱水と流砂が五年来至る所で臨沢の農民の耕地を奪い去っていることがよく分かった。（134～136頁）

二十日から二十四日の間に臨沢県に近い沙河鎮〔今の沙河村〕に行き、徴税の実際の状況を見聞する。一部分を以下に訳出する。

沙河鎮には二つの倉があって、一を沙河倉といい、一を甘州倉という。その実は二つの倉は同じ場所に設置されている。全部で八棟あるが、中はひどく壊れていて、どうにか用に堪えるのは四棟だけである。積穀容量は千五百石以上。倉書・斗級・雑役等全部で十名ほどが臨沢県政府から派遣されてここで仕事をする。私が沙河鎮に在った数日はちょうど納税の日で、穀物を牛車に積んだ付近の農民たちがぞくぞくと沙河鎮にやって来た。車が倉に着くと、袋詰めにした穀物はすべて車から下ろされて倉庫の事務所に運ばれる。斗級たちは早速手分けして一升、一斗と量り始める。量り終わって当然一斗となったのに、さらに三升や五升ほどが余分に地上に別に取り置かれる。これを看糧という。看糧を出してようやく倉書の所で納税証書がもらえ、帰宅できる。看糧は、県政府から派遣されて来て納税を監督する課長への謝礼になるのだとのこと。ただし、実際はやはり県政府の倉庫課のみなが分け前にあずかれるのだ。これは驗糧や斛面等の（額外徴収の）悪習が改革されてから後の新しい手口である。往年省内各県の悪習の改革を提唱した甘肅省長薛子良¹⁰先生がこの種の状況を聞き及んだ時、どんな感想をいだかれるか知りたいものである。（138～139頁）

二十五日昼過ぎ、沙河鎮を立ち、夕刻、沙井〔今の張掖市沙井郷〕の一夜宿に投じた。

二十六日、馬糞を燃料にした宿のオンドルが熱すぎて背中が焦げそう。寝ていられず、早起きして早立ち。途中崖子村〔今の下岸子村〕付近の沙州で古墓を試掘した後甘州（張掖）城西門に入る。

九月二十七日から十月五日の間は甘州にあり、山西商人、農産品、人民の負担、教育、新編第九師団¹¹⁾ 第三旅団のこと等々種々見聞を尽した。「二十 金の張掖」がこれに対応するが、以下にその大半を訳出する。

河西官界には——所謂上流人士の社会まで含めて——“金の張掖、銀の武威、銅の山丹、鉄の高台”という諺が行きわたっている。この諺は河西一帯の富裕地域を挙げつつ、さらにそれら富裕地域のランク付けをする。というわけで、張掖は当然一帯で最も繁栄している地域である。私はここ数日の滞在で各方面につき一応の理解を得た。

当地の繁栄の主要な社会的条件としては、当然当地農村の生産力を考慮しなければならない。張掖全県の年間農産物は結局どの程度の生産量になるのか？ 当地の建設局が調査した本年の数値中から明確な回答を得ることができる。

項目	数量	付 注	項目	数量	付 注
コムギ	52668.00	単位石 (100l)	オオムギ	81928.00	単位石 (100l)
ソバ	1756.60	同上	ハダカムギ	1463.00	同上
ウルチ米	21928.00	同上	モチ米	5542.00	同上
大豆	29261.00	同上	未脱穀アワ	49000.00	同上
菜種	44600.00	同上	ゴマ	7020.00	同上
コーリャン	3561.00	同上	アヘン	146320.00	単位両 (50 g)
ヤマイモ	105300.00	単位斤 (500 g)			

これらの農産物こそ本年当地の農民が全県三十五万三千七百十畝（1 畝は 6.667 a）の耕地から収穫した主要な成果なのだ。これを河西のその他各県の本年の数値と比較するなら、当然誇るに足る。しかしながら当地の十数年以前の生産量と比べてみたい。明確に低落を証明できる数字はないけれども、十数年来で、十万四千八百三十畝——現有耕地のほとんど三分の一——の土地が荒蕪化し、放棄されている。このことは生産量が不断に減少していることを物語る！

目下張掖市街は依然として十分に盛っている。鼓楼を中心とした十字街頭は相変わらずとてもにぎやかで——とりわけ南街と河西街——、道路は石畳になり、モダンに手入れされている。路面の幅は一丈ほどで、ほぼ弧形を呈し、両側には各二尺幅の開渠があるほか、さらに幅は一定しないものの歩道があり、道の開渠よりにずっと並木が植えられている。全体として、涼州（武威）や肅州（酒泉）の大通りを彷彿させる。大通りの両側には河西各地のそれと比べても規模の大きい商店が沢山ある。一部の店舗は間口を大変広くとっているが、他にまた顧客を狭い通路から奥の中庭へと引き込んで、両側に並べたカウンターで商売をするのもある。商品中には品切れなしの大砲台印のシガレット、パリからの化粧品、一瓶三十五元の三つ星の斧ブランドのブランドー、精巧を極めたアヘン吸引具、沿海部から来た上品な麻雀牌がある。この他にまた沢山沢山の“太陽牌”^{にほんせい}の物品！

これら大店の主人はたいてい山西から来ている。かれらは営業に専念しているわけだが、少し

近づきになると、雑談のなかで、客を相手に最近商売がどうも今一つぱっとしないと思痴ったりする。かれらは国内の混乱には思いを凝らすのに、農村の購買力の低減にはあまり注意をはらわない。(市場での今月の物価はおおよそ以下の如しとして、32品目の価格が表示されてあるが、うち5例のみ抽出する。キャラコ 33.3 m 8.60 元、白砂糖 50 kg 48.00 元、アヘン 5 kg 78.00 元、羊毛 50 kg 16.00 元、白米 10 l 2 元)

張掖の主要通商ルートは全部で四つある。一つは北仁宗口に出て、阿拉善旗地、磴口を経て包綏に到るもの。これは駱駝の隊商のルートで、全行程約四十日。一つは南民楽、扁都口、俄トを経て西寧に到るもので、全行程約十日。この道路はもう出来上がっていて自動車が通行できる。一つは東涼州を経て蘭州に到るもの。もう一つは西肅州を経て安西に到るもの。後者二つを合わせたものが、河西を横貫する幹線路である。これら四本の交通路も張掖の繁栄を維持する要因の一つである。

張掖の人民は毎年全部で三十万元以上の金額を持ち出すけれども、全県一年の教育経費はわずかに四千六百元にすぎない。県城内に創設間もない初級中学が一つあり、その経費は教育庁の補助金も入れて年に二千七百元。年に二千七百元の経費で一つの初級中学を維持するのだからその成果は想像がつくだろう。目下は相変わらず四二制の規定に従って四学年に分けてある¹²⁾が、生徒は全部合わせても八十九人しかいない。ほかに高級小学が二つで、生徒は九十四名、初級小学が六十で、生徒千余名。初級小学の教科書に関しては、現代の出版社が刊行したものがすでに採用されている。とは言え、『千字文』『百家姓』『孟子』『論語』『大學』『中庸』等々も廃するわけにはいかない。学校教育とは別に、一箇所民衆書籍新聞館がある。しかし、毎日ここに来て閲覧する者、とりわけ所謂民衆なる者は極めてまれである。今年四月、教育局が城内に民衆教育館を開設した。館内には陳列室があり、古色燦然とした六朝の金銅三尊仏が一行に並べられている。ほかにも仏教経典や衣装甲冑刀剣の若干がある。敷地の隅で狐やウサギが飼われており、門口の講演室は実際は茶店で、いつでも四、五卓の茶客がいて、一人二人の講釈師を囲み、それぞれに「趙雲阿斗を抱く」「包竜図のお裁き」から「私訂終身後花園」「災難を被った若旦那状元となる」等々の類の講釈に耳を傾ける。当地の所謂社会教育とは大体まずこのようなものである。敦煌滞在中、省視学官趙子文先生は私に“河西の教育ではやはり張掖がいくらかましです”と語ったことが思い出された。甘肅の教育の前途はどうなるのか？ 私にはさっぱり見通しがたたない！

かつてここは甘州提督の駐防する所だったが、現在は新編第九師団第三旅団司令部の所在地である。第三旅団は新九師の精鋭をもって張掖に駐屯する。旅団司令部の規模は大変大きく、八大部局の組織を有する。将校は回族と沙拉人¹³⁾である。将校相当官(軍医・主計等)の大半は漢人である。韓旅団長は大変客好きである。客は物々しい営門をくぐってしまえば、あとはいつでも応接室で韓旅団長¹⁴⁾の満面春風の接待にあずかれる。応接室の四壁には各県から送られた“徳政”を顕彰する深紅の緞子が数えきれないほど沢山掛け回らされている。さらにオンドルの壁際に置かれた幅一丈ほどの木製の棚の上には付近一帯の上流人士の写真がぎっしりと並んでいる。もう陰暦の中秋節に近いので、ここ数日、民楽・臨沢二県の県長はじめ該地の紳士方いずれも張掖にやって来て旅団長に慶賀しているのだそう。

紳士方については、やはり張掖が場所が大きいせいか、人材も多いようだ。紳士には勿論資格がある。一つは、現任の農会会長・商会会長・各區區長・各局局長等々、二つには前清ないし北

京政府時代あるいは少し前に一寸した役職を勤めた者、三つには暮らし向きが豊かでいくらかの地位のある者——要するに地域の権威者である。かれらの大部分は県政会議に出席する資格を有するが、日常唯一の任務は、(県) 政府や駐屯軍と人民の間の“仲介人”になることである。この頃は多くの紳士方の——教育局長とか農会会長のような——屋敷の正門には“就任通知”だの“吉報”だのとでかでかとした赤い紙が貼ってある。いずれも青海南部辺区警備司令部の参議だの参謀を委嘱されたというものである。かれらの中の最高ランクが顧問で、委嘱されたのはただ一人、名声赫々たる当地の大紳士毛某である。その他は全部参議だの参謀だのの類である。かれらは何故委嘱されるのか？ 地域においてもものごとを処理する能力があるからだとも、駐屯軍の面倒をよく見るからだとも言われる。結局はどうなのだ？ ちゃんと説明してくれた人はただの一人もいなかった！

さて、ここ数日、張掖の官界中の目新しい話題は少し前に登場した、以下の二枚の匿名の貼り札である。

その一：

“全県の皆さん、われわれ張掖の人民の現在の苦しみは如何ばかりか。路××と李××の人でなしの二匹の畜生はやって来ては、一本のアヘン苗も検査しないで銀貨六千元をむしり取る。だれでも知っていることだ。あいつ等がわれわれの血と汗を勝手にもって行っていいはずがない。立ち上がってあいつ等に反対しよう！”

その二：

“皆さん是非来て張視察員の新しい手口を見て下さい”という標題で、血だらけバラバラの人体を一匹のオオカミが貪り食らい、その傍らには馬蹄銀数個と大清銀貨一枚が散らばっている絵が描かれている。

これは本当なのか？ うそなのか？ 事件が発生した当初から、地方行政に携わるお役人方はひたすらもう可否を言わない。当事者もまた何らはっきりした態度を示さず、“三十六計”中の最上策“逃！”を決め込んでいる。

(九月) 二十七日から十月五日の間、金の張掖から私がどのような印象を受け取ったか？ 上記幾つかの事柄は仔細に味わうに値する。(以上、「金の張掖」終わり)

十月六日昼、友人礼君が私を甘州(張掖) 城の東関まで送ってくれた。四十里鋪にて一泊。

七日、祁連山北麓の一並びの支脈の裾を東に進み、沮渠蒙遜の誕生地南固城[今の民楽県南固郷]を経、民楽県西境の一村落に着いて一夜を過ごす。

八日、民楽県城[今の民楽県城、即ち洪水堡]西関に到って宿る。十三日までの間、民楽県に滞在。

十四日午前十一時、雪山に近接したここ洪水堡に別れを告げ、東北に進み、満州から来た旗人の住む劉総旗[今は村名]を過ぎて、夕方土関というところ(一名[永寿村])の宿で休む。

十五日、この日は土関に在り。

十六日午後、土関を立ち、廟底下という炭坑の所在地や瓦窰溝村[今は瓦窰溝と称す]という製陶地を経て、夜の七時ごろ山丹県城内の旅館に着いた。山丹県城のにぎわいは高台と同じほどで、張掖には遠く及ばない。ここには用水路が一本あり、南関から城内に引き入れられ、それから城北へと流れ出る。城内の飲み水や洗い水はこの用水路から取る。時には上流で洗い物をして

いて、下流で飲み水を汲んでいる。以後二十二日まで山丹県城に在り。(150～151 頁)

二十三日早朝、友人湘君とともに県城の東門より山丹県城に別れを告げる。以下二段に訳出したのは二十三日と二十四日の記事。これで目次「二十三 石燕飛ぶ」中の半分ほどに相当する。

五里余も行かずに、県城近郊の莊園は尽き、草の生えた河原へと歩み入った。三十里の長丁場、南側遥か遠くには夏の雪を戴いた祁連山の余脈が長く連なっている。北側は相変わらずどす黒い龍首山の余脈で、山裾を電信柱と長城が規則正しく平行している。この三十里が尽きたところに、住民二十戸ほどの新河〔今の新河村〕がある。この数日大軍が境界線を越えて行く——新編第九師団第三旅団が甘州（張掖）から永登に向かって出発し、孫殿英¹⁵⁾の部隊が西進するのを防止するため、それで、当地の情勢は大分緊張し、通りの小商いは目出度く店じまいしてしまい、兵站の人員と番兵が村の出入り口あたりに気を配っているだけだった。私たちの車夫は引張られるのを恐れ、大急ぎで食事をすませてすぐ出発した。食事というのは、人間様が食って飲んで、馬にも食わせて飲ませ、^{アヘンちゅうどく}隠君子たちはその上さらに急いでオンドルにはい上がってスーハーやるので、本来ならどうしても二時間はかかる。このたびはどの仕事も大馬力で、一時間もかけないですませるや馬を車につないで出発した。私たちは高原の坂を上ってから荒れ果てた河原を二十里ほど行き、廃墟となった集落の跡を過ぎてからさらに草の生えた河原を二十里行った。すると、南北両側の山脈が接近して出来た鞍部にオンボロボロの村落が出現した。私たちがこの破口駅〔今の峡口村〕の古い集落に入ったのは日暮れて風も冷たくなったころであった。夜、病んで死にそうな宿の主は何と、もうすぐ御陀仏だから、甘州（張掖）で買った中秋の月餅の美味しいのを持ってないかと問いかけてきた。彼は私たちのお陰で口腹の欲が満たせるかと思ったのだ。うまい具合に湘君が月餅を沢山持っていたので、この凄惨にして出し抜けな要求にもどうにか応えられた。

(二十四日) 私たちは医者ではないし、また病人の長夜の呻吟を聞くのも耐えがたく、鶏が時を告げるころ、早速出立した。ほのかな星明かりのもと、幅一丈余り、十里ほどの長さの石の峡谷を抜けた。抜けた東側、草の生えた河原を十里も行かないうちに定羌廟〔今の繡花廟〕に着いた。ここには本来三十余戸の住民が居たのだが、近年たびたび匪賊の害に遭い、人さらいや羊泥棒等年中寧日ない。そういうことで、ここを通る者もまた隊を組まずには行けない。現在の定羌廟は、人が住んでいる家は五、六軒だけで、その他の家屋には人煙なく、荒れ破れるに任されている。ここはあえて車を止めさせず、鞭を加えて前進させた。行く手の景色は相変わらず一面草の生えた河原で、河原の両側には依然として南の山と北の山が遥かに遠く向かい合いつつ連なっていて、電信柱と長城は北の山の山裾に平行している。なお、このあたりの南の山は祁連山の余脈の支山で、頂に雪はない。話によると、付近の山里では、風の吹く季節になるたびに岩壁のあたりに石燕が飛来するとのこと。破口駅と水泉駅〔今の永昌県水泉子村〕の羊飼いの子供たちはしょっちゅうこの石燕を棒で打ち落として売り物にするとする。本当にそんなことがあるのかと気になったので、さらに三十里行って水泉駅に着くとすぐに半元出して所謂石燕なる物を一個買ってみた。何と、海中の甲殻動物の化石で、形状は私どもの郷里の海でとれるアサリの類であった。私が思うには、風化した礫石層の崖の中に海中の甲殻類の化石が混じっていたのであろう。これによって、古代の大陸が隆起して今の河西の陸地になったことが分かる。ただ、もともと海産の物とめったに接触しない内陸の住民がこのような化石を見つけ、その形が空を飛ぶ燕に似て

いたものだから、石燕などと名付けられることになったのだ。おまけに当地の古籍に淫した老学究たちがこのての石燕を“商羊¹⁶⁾ 舞、石燕¹⁷⁾ 飛”の石燕だとか何とか解釈した。また、女性が難産の時、片手で石燕を一個握りしめるとすぐに胎児が出てくる……等々の説もある。このようなテーマに関しては私は興味がないので、これ以上深くは立ち入らない。

二十四日午後、永昌県西境の水泉駅を立ち、三つの低い石だらけの山を越え、さらに草の生えた河原を二十里行ってから、東に流れる澄んだ一筋の泉水の溝道に沿って進む。この全行程四十里の終点で、私たちの大車は水磨関〔今の永昌県焦家莊郷の所在地〕の村の旅籠へと駆け込んだ。

二十五日早朝出立。永昌県城東門外の宿に投ず。午後は大雪となり、そのまま休息。夜は民衆より携え来たった青稞酒（ハダカムギの焼酎）を飲み、熟睡。

二十六日明け方雪止み、永昌県城を出立。住民十数家の八垣〔今の六垣郷八垣村〕にて休息。「八垣もまたまったくオンボロボロの村落である。どの一事につけ目に入るすべては貧乏で、みじめくさい。私たちが泊った宿の隣家は、どうにも暮らせなくなって、三箇月前に十八になる娘を売った。雇い主はその当座子供を産んでもらうためとか言って合計で銀二十元の結納金をよこしたそうだ。ところが何とこの雇い主は、娘を連れて涼州〔今の武威市〕へ行って数日泊った後に四十元で妓楼に売りとばしてしまった。娘は妓楼で塗炭の苦しみの一箇月を過ごして後、今度は自分の体が八十元で別の妓楼に転売されることに気づいた。自分がだんだんと郷里から遠ざかり、帰る道筋は断ち切れ、いっそう深い苦海に沈むかと思った彼女は、涼州まで来て自分を助けてくれるようにと、八垣へ行く人をさがして父母に言づてた。しかし、父母は娘を売って得た二十元で、三日後に十元の公課と五元の借金を払い、三箇月の生活の費用として三元を使い、今は二元しか残っていないのだ。涼州への旅費は何とか都合をつけたとしても、家の生活費はどうする？ 涼州に着いてから後の上申書の費用は？ 帰りの費用は？ 娘を連れ帰ったとして、さて何処にかたづける？ 父親はこのような現実問題の前に往生し、娘は捨てられた。残った二元の金が一家数人の一、二箇月の余命を保つのだ。親たちは永別の境遇を思っては老いの涙も滂沱として止めがたいのだが、だからと言ってどうなるか？ 結局は“娘は例えば死んだようなものだ”と思いなして自分に麻醉をかけ、“阿Q”式でこの一場の惨劇の幕を引くのだ！」（153～154 頁）

この二十六日、さらに武威境内豊楽堡〔今の豊楽郷〕まで進む。「この地で特記すべきものとしては、小学校をあげなければならない。時間割には国語・算術……等々現代学校教育課程の学科目が勝手に書かれてあるけれども、実際のところ『四書』『五経』の他には習字一科目があるだけだ。とは言え、河西ではこんなことは何も珍しいことではない。かりに誰かが責任者に質問したとするなら、質問した方が無知な世間知らずと言うことだ！」（154 頁）

二十七日朝（原文に「二十六晨間」とあるが、「二十七日晨間」とあるべきであろう）、豊楽堡を出立、午後、涼州（武威）城内に入る。孫殿英の部隊の西進に備える河西駐軍で旅館が満員だけでなく、車輛が徴発され、私たちが雇える車はない。それで、十一月二日まで涼州城内に止まるほかなかった。

十一月二日夜、湘君はハミで知りあったカシュガルの回族の友人アダブラ（アブダラ？）君と涼州（武威）城東関で再会した。以下の二段は、そのアダブラ君に関わる。

私たちが明日は蘭州に向けて立つことを知ったアダブラ君は、すぐに私たちを自分の宿に案内

した。沢山の干ブドウ・アズンの砂糖漬け・角砂糖・磚茶^{たんちや}等を取り出してもてなしてくれた後、さらに手抓飯^{てづかみごはん}を作ってくれた。これで初めて手抓飯の作り方を知った。まず羊の脂身を鍋に入れて加熱する——優に鍋の半分は入れる——食塩を加えてこれがバーッとほじけるぐらいまでに油を熱してから、半寸角ほどのサイコロに切った羊の精肉を順に入れ、次に洗って切っておいた馬鈴薯をどっさり入れ、さらに水洗いしたウルチ米と刻んだ大根を入れ、きっちりと蓋をする。一時間ほどして、手抓飯が鍋ごとオンドルの上の小さな方卓上に運ばれてきた。さっそく銅の杓子で碗に盛る。それからは五本の指を総動員して、碗から口へと飯をかき込む。私はこれまで手抓飯を食べたことがなく、生まれて初めてのことで手抓みの技はつたなかった。しかし、飯の滋味は十分に味わった。その美味さは勿論細切り豚肉と卵入りの炒飯等の比ではない。四杯食べて碗を置いた後、拭いた手で干ブドウをつまみながらアダブラ君の不慣れな漢語を聴いた。

アダブラ君が言うには「家には数百万の資産がある。ただし、カシュガルには資産数千万の大バ^バイ^イ（金持ち）はいくらでもいるから、自分の家等はちょっとした商売人と言える程度だ」とのこと。彼はトルキスタンのタシケントへ行ったことがあり、またヒンドゥスタンのペシャワールへ行ったこともある。それで、流暢ではないけれどもロシア語と英語も少しは話せる。実際のところ、経済上・交通上の関係よりして、彼らカシュガルの商人は漢語よりもロシア語と英語のほうがよほど上手なのだ！ イスラム商人同士の対話には万事まじりけなしの純正トルコ語が使われる。これは回族の使うアラビア語ともヒンドゥスタンのイスラム教徒の使うペルシャ語とも違う。アダブラ君はまたカシュガルの建築、カシュガルの習俗について語った。一切すべて欧化の度合いは深い。カシュガルのあたりには、イギリスの勢力が入り、白系ロシアも潜伏しているし、また共産党も活動している。総体、新疆政府の役人たちの多年にわたる圧迫によって、人びとは次第に中国との間に垣根を作るようになった。つまり、アダブラ君は今回綿花を東に運んで来たのだが、荷が肅州（酒泉）に着いて、特税局へ百貨税を納める段になると、嘉峪関の関税も納めなければならない。イスラム商人をまるで外国から来た者あつかいして税金を二重に徴収している。……これが事実なのだ。この誠実なカシュガルの友人に対して、どんな申し訳ができるのだ！ 私たちはもうゆったりと落ち着いて話をしていられなくなった。一段落した後、アダブラ君に丁重に謝意を表し、宿舎にもどった。（158～159頁）

三日、友人逸君は私たちを涼州城の東郊まで送ってくれた。河東堡〔今の河東郷〕を経て、古浪県城に到って宿る。

四日午後古浪県城を出て南に向かい、夜十一時龍溝堡に到って宿る。

五日安遠街〔今の天祝チベット族自治県安遠鎮〕を経て、積雪の烏鞘嶺〔今は烏鞘嶺と書く〕を越え、鎮羌駅〔今の天祝県金強駅村〕に宿る。

六日午前、莊浪河西岸に沿って進み、岔口駅〔今、天祝県に属す〕に到る。

七日昼ごろ永登県城に到る。孫殿英軍の西進を防ぐため、六千余の兵が城内に結集して騒然としている。それでさらに三十里南下して南大通〔今の^大同郷〕に到って宿る。

八日早朝、南大通を出発、正午ごろ紅城堡〔今の紅城郷〕を通り、午後咸水河に到って宿る。

九日、産塩地として有名な哈家嘴〔今の永登県樹屏郷〕等を経て硬水で悪名高い朱家井子〔今の皋蘭県朱家井村、南は蘭州市安寧区と界す〕に泊る。省都まではもう四十里である。以下明日を仮想して、擱筆される。この最後の段落全文。

両側の土山は谷間の道に次第に迫り、山と山との間、幅一丈少々 of たった一筋が通路となる。この谷あい of 道を行くと、四周 of 沙土 of 剥落してしまつた山の頂が見え隠れするのを望むことができる。谷 of (上方) 開口部沿いにまるで幾切れか of カステラを並べたみたいだ。ほかには谷 of 水の上を車輪が転回して行く単調な音を耳にするだけである。こうしてたつぷり二十里も行くと谷 of 出口になる。突然前面に明るく広々とした果樹園が出現する。園中ナシ of 樹が整然と並び、樹林 of 背後には滔々と流れる水 of 輝く黄河が見え隠れする。私たちのコースは東へ折れる。左手は山裾に寄り、右側は河辺 of 果樹園に近接している。真っ直ぐに十里舗〔つまり、安寧区十里店郷〕、金城関をぬけて、南に向かつて黄河 of 鉄橋を渡り、こうして皋蘭山北麓、黄河南岸に位置する蘭州市街にとうとうたどり着く。河西数箇月間の経歴ははや頭のなか of 一個 of 記憶と化するのだ。(163 頁)

V 著者明駝について

著者明駝の経歴について、本冊点校者は「生平無考」と記した(3 頁)〈35 頁〉。紹介者にも何等知見はない。ただし、明駝は東南沿海地方の出身かとも思われる。九月十八日、臨沢県城郊外、弱水北岸 of 用水路とポプラの並木に彩られた仙姑廟—平川堡間の風景について、流砂に侵略占拠されてしまつた右手を見なければという条件をつけた上で、「ほとんど上海西方 of 田舎にでも居るようなつもりになつた」(136 頁)〈45 頁〉と言う。十月二十四日、水泉駅〔今の永昌県水泉子村〕で石燕なるものを手にしては「海中 of 甲殻動物 of 化石で、形状は私どもの郷里 of 海でとれるアサリの類で」(152 頁)〈49 頁〉と言っている。なお、八月九日、敦煌月牙泉に遊んでは「泉の面積は普陀山 of 盤陀庵 of 養魚地 of 六倍はある」(102 頁)と記している。中国仏教 of 霊場普陀山は杭州湾に浮かぶ舟山群島中 of 一島嶼である。以上、漠たる推測 of 「手がかり」三箇所を引いた。

「友人」や同行者のこと。八月二十日午後、安西城を立つ時の記述には「同行 of ×××君」とある(115 頁)〈41 頁〉。九月五日、肅州(酒泉)を立つ時の記述には「友人允・靖 of 二兄が私を城東五里外 of 柳蔭橋のたもとまで送ってくれた」(128 頁)とある。十月六日昼には「友人礼君が私を甘州(張掖)城 of 東関まで送ってくれた」(146 頁)〈48 頁〉とある。また、十月二十三日早朝、山丹県に別れを告げるところで、「私と友人湘君等は県城 of 東門を出た」(151 頁)とあって、「友人湘君」が初出する。この夜、硤口駅に宿をとり、瀕死 of 宿主に湘君が甘州(張掖) of 月餅を恵む羽目になる(152 頁)〈49 頁〉。この後十一月二日夜、涼州(武威)城東関で、湘君は以前ハミで知りあつたカシュガル of 回族アダブラ君と再会する。湘君ともども明駝もアダブラ君 of 宿に招かれ、手抓飯を供応されることその他は本文中に訳出した(158~159 頁)〈50~51 頁〉。湘君はその後も同道したものらしく、同月七日永登県城近辺での記述にも登場する(161 頁)。「(九月)三日午前、友人逸君が私たちを涼州 of 街 of 東のはずれまで送ってくれ、そこで別れの挨拶をした」(159 頁)との記述もある。湘君は送られた「私たち」の内に含まれよう。逸君はここに登場するのみ。総じて、これら数名 of 「友人」なる者の詳細、実態は不明である。道中邂逅して、一時意気に投じただけの仲なのであつたのだろうか。

「酒泉県長×先生」(123 頁)〈42 頁〉と初出するのが、後では「魏県長」(125 頁)〈44 頁〉と記されている例がある。安西出立の際に初出 of 「同行 of ×××君」もその後に登場する湘君と同

一人物の可能性がある。そうだとすると、さらにこの湘君は、敦煌出発の時から、蘭州にたどり着くまでの復路全行程を明駝に同行し、援護したのかもしれない。

范長江の名著『中国の西北角』は、一九三五年七月初旬に成都を出発して以後、東は西安まで、西は敦煌まで、北は包頭まで、十箇月を費やした旅行の記録である。これの「第四篇 祁連山北の旅」中の「3 弱水南岸の風光（上）」に「友人明駝君の統計によれば臨沢県第四区の民国十九年（1930）度の収穫は千四百四十五石だったのが二十三年（1934）にはわずか八百八十一石で、五百六十四石の減少となった。按ずるに耕地十畝についての平均収穫高を一石として計算すれば、五年の間に、すでに五千六百四十畝の耕地が荒田となってしまったわけだ」（150 頁）という。范長江が、張掖から西行して臨沢県を過ぎるのは、一九三六年一月後半のこと。明駝は一九三三年九月後半臨沢県に西来しているが、范著の引く「友人明駝君の統計」は『河西見聞記』には見えない。「生平無考」の明駝は范長江の「友人」だったということを指摘しておく。ただし、范長江が何時、何処で、あるいは何時から、何処から明駝と友人になったのかは分からない。

范長江、本名は范希天（1909～1970）。四川省内江県の人。一九三五年七月、二十六歳の時、天津『大公報』の特約通信員として成都を出発。以後「西は敦煌まで、北は包頭まで、全行程四千余里、時を経ること十箇月、その足跡は四川・陝西・青海・甘肅・内蒙古にまで及んだ。『大公報』に「長江」と署名された旅行記の連載がはじまるや、たちまち多数の読者の熱烈な歓迎を受けた¹⁸⁾」。

范長江の場合、西北旅行の目的、その際の身分等ははっきりしている。対して明駝は西北旅行の目的について「去年（1933 年）の夏、私は用事があって」（96 頁）〈35 頁〉と記すが、用事の内容は一切不明であり、自分の身分についてもふれない。

明駝著は蘭州から敦煌への往路のことは原則として対象にならない。彼の用事、旅行の主目的は往路で果たされたのであろうか？ 復路はいくらか解放された気楽さもあったのだろうか？ 滞在先や旅程中の交際相手はほぼ地方官吏や軍人である。こういう人たちの接待をうけたり、話をきいたりし、また地方都市の市況や教育事情、農村や宿駅の情况等々を観察している。もっとも道中の宿等は官衙や官吏の世話を受けず、独力もしくは湘君ともども自ら奔走した如くである。

(2003. 10. 25 脱稿)

註

- 1) 「西北行記叢萃」中の『西北考察日記』は、開本 850×1168 mm 1/32 印張 8.5 挿頁 2 字数 203 千 印数 3 千 ISBN7-226-02360-1/K・402 定価：14.80 元。巻頭の「編者の話」中に、「西北行記叢萃」は「沢山の西方旅行記中より選び集めて作成する。叢書の第一輯は 19 世紀以降の西北旅行記中の名作併せて 25 種を選んで収録し、10 冊に編集する」と言い、末尾に「編者 2001 年 5 月」とある。紹介者は『西北考察日記』以外を目撃していない。
- 2) 顧頡剛とその『西北考察日記』については、小倉芳彦著『抗日戦下の中国知識人—顧頡剛と日本—』（筑摩書房 1987 年 5 月）および『小倉芳彦著作集Ⅱ—吾レ龍門ニ在リ矣—』（論創社 2003 年 7 月）参照。
- 3) 底本には目次がないが、G 本には「河西見聞記目録」と題して目次を載せる。また G 本は底本にない 6 枚の写真と甘肅・青海両省省界付近の略図 1 枚を載せる。目次と地図に関して S 本は底本と同様。
- 4) 原文「没面羊裘」。ある中国の友人に尋ねたら、「顔が隠れるようなフードつきの羊の毛皮の外套」では

なかろうかと解釈してくれた。ところが、范長江著『中国的西北角』（生活・読書・新知三聯書店香港分店 1980 年 2 月。以下、「范著原書」と表記する）に「没有面子的白老羊皮大衣」（92 頁）とあり、范長江著／松枝茂夫訳『中国の西北角』（筑摩書房 1983 年 2 月。以下、「范書日訳」と表記する）はこれを「表をつけない白羊の毛皮の外套」（103 頁）と訳す。訳はその通りで致し方ないが「表をつけない」という現物のイメージがわからない。なお、范書日訳の原版は范長江著／松枝茂夫訳『中国の西北角』（改造社 1938 年 1 月）で、当該箇所訳に変わりはない（158 頁）。松枝訳の底本は范長江著／孟可權編『中国的西北角』（天津大公報館出版部 1936 年 8 月）のはずだが、上記范著原書で代用した。

- 5) 巴彥布刺は鎮名か？ G 本は巴彥布刺汎とし、S 本は巴彥布刺泛とする。
- 6) 西北科学考察団。1927 年から 1935 年にかけて中国西北の新疆省・寧夏省などを調査した学術探検隊。スウェーデン人ヘディンを隊長とし、隊員はスウェーデン人と中国人が大多数。その活動は 3 期に分けられるが、学術上の成果は主として 28 年秋から 33 年秋にかけての第 2 期にあげられている。
- 7) 年羹堯（1679～1726）清康熙の進士。四川総督、川陝総督を歴し、チベット・青海方面の平定に功あり。雍正帝の猜忌に遭い、死を賜る。
- 8) 新編第三十六師団師団長は馬仲英。（郭卿友主編『中華民国時期軍政職官誌（上）』甘肅人民出版社 1990 年 12 月 参照）
- 9) 臨水駅を G 本は臨水驛と作り、S 本は臨水□（三字目空格）とする。
- 10) 薛子良（1892～1973）子良は字、本名は篤弼。山西省解県（今の運城）の人。山西法政学校卒業。長安県長・北京政府司法部次長・内務部次長・京兆尹（北京市長）等を経歴して、1925 年 10 月から翌年 9 月まで甘肅省省長。第二次大戦後、1947 年 4 月には、行政院政務委員兼水利部部長。中華人民共和国成立後は、中国人民政治協商会議上海市委員会常務委員・中国国民党革命委員会中央委員兼上海市委員会常務委員等に任じた。（徐友存主編『民国人物大辞典』河北人民出版社 1991 年 5 月 参照）
- 11) 新編第九師団師団長は馬步芳。（郭卿友主編『中華民国時期軍政職官誌（上）』参照）
- 12) 底本と S 本はここを「依旧照四二制的人分四級，……」と作るが、G 本は「依旧照四二制的編制共分四級，……」と作る。今 G 本に従って訳した。ただし、四二制については不明。
- 13) 沙拉人。現在の中国の少数民族の一つ撒拉族であろう。撒拉族は自称撒拉爾^{サラール}。青海省・甘肅省に居住し、多くはイスラム教徒で、言語はアルタイ語系チュルク語派に属す。1990 年の人口 8.8 万人。
- 14) 韓旅団長。范長江は 1936 年 1 月 18 日「韓玉山先生」に「ぜひとも自分の軍隊（馬步芳の基本部隊）を見てくれ」と引留められて、張掖を立つのを半日のぼしている（范書日訳 147 頁）。韓旅団長は范長江の会った韓玉山と同一人物のはず。
- 15) 孫殿英（1889～1947）字魁元、河南永城の人。河南省西部で活動した土匪より出身。1928 年 6 月、蒋介石に収容、改編され、第十二軍軍長となる。1933 年華北第九軍団長となる。同年 5 月、軍事委員会北平分会委員、青海省政府西区屯墾督弁となる。日中戦争中戦敗して捕らわれ、汪精衛政権の豫北剿共軍総司令等をつとめる。日中戦争終結後、新編第四路軍総指揮、第三縦隊司令官等に任ぜらる。国共内戦中河南省湯陰県で人民解放軍の捕虜となり、獄中にて病死。（徐友存主編『民国人物大辞典』他参照）
- 16) 商羊は伝説上の鳥の名。商羊が舞うと洪水が起こるといふ。『説苑』『論衡』『孔子家語』等に見える。
- 17) 石燕。『本草綱目』は、石燕には二種あると言う。一は燕の形に似た石で、雷風に遭えばよく飛揚する。一は蝙蝠に似た鳥で、鍾乳穴中に産し、石乳汁を食する。
- 18) 范書日訳巻末の松枝茂夫執筆「解説」による。